土佐和紙・版画・共存共栄
金儲けのできるあきんど育成を

森　みきお　議員

平成29年10月7日から12月3日まで開催された、高知国際版画トリエンナーレ展の関連事業としてシンポジウムが開催され、その中で「土佐和紙は高知の代表産業、国内外で広く知ってもらい、世界に誇れる高知の版画展として、今後も続けていきたい」という意見が出た。

保存会の会長からは「和紙工房が減ると職人や後継者も育たない」「新たに始めるにはハードルが高くなる」「さらに価格が高騰すれば手が出せなくなる」という厳しい意見が出た。このような、数多くの意見や提案・訴えまでもがあったが今後、どのような形で生かしていくのか。

また、土佐和紙を売るには子どもも巻き込んだ商売が必要、町内には商業高校がある。その力を借りて金儲けのできる商人（あきんど）育成が必要であるが、その取り組みは。

久松副町長

同展への土佐和紙の振興は、県手すき和紙協同組合や製紙工業会などの関連機関との連携を図っていく。どのような形で生かしていくかについては、土佐和紙国際化実行委員会の中で検討していくことになる。

また、子どもに対しても土佐和紙に触れ、身近なものとして感じてもらうために、小学生を対象にしたイベントを行うなど活動している。地元の高校生の前向きな活動を応援するとともに、アイデアを吸収しながら人材育成に取り組む。

希望ある街づくりへ
伊野商業との連携を

森議員

町は「紙の町・水の町」である。紙の博物館付近は、地下水としての水の宝庫であり、町の上水道や製紙工場の水源地となっている。その地下水を汲み上げ水汲み場を設置し「おいしい水」として、町を売り出すとともに、紙の博物館・商店街へ導くような計画も、市街地活性化につながると思われるし、水を汲み上げるには小さなモートルポンプでも、形を変えた手押しポンプでも十分に汲み上げる力はあると思われる。大きな費用はかからないが、いかがなものか。

手押しポンプは災害用にも役立つ、町全体でも考えるべき。

伊野商業高校で町を売り出すために、いろいろな企画や制作などの活動を行っているが、町との連携がまだまだ薄いように思われる。人を集める・人を動かす・金を稼ぐために様々な知恵を借りながら、町を「明るく・楽しい・ゆかいな」希望のある街づくりへと急がなければならない。他の市町村ではキャラクターが目立って活動の中心となっているが、町も新たに紙や水をイメージしたキャラクターを考えてみてはどうか。

街中に親子や高齢者が休憩できるベンチなどを設置し、目の前の道路を工夫しながら紙（ダンボール）・木・竹などを利用した小細工人形の設置などを考えてはどうか。

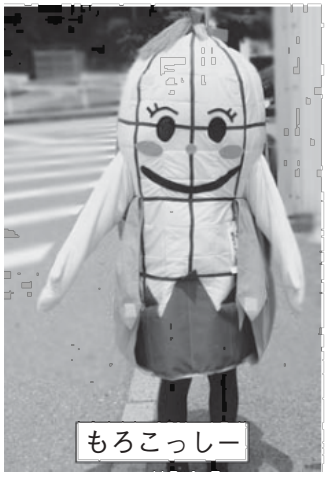
また、いろいろな趣味を持った方々も集まり、作品制作に利用できる工房施設を設置すれば、人も集まり動くとも思われるが、いかがなものか。

久松副町長

水汲み場設置については、飲料水として使用するには水質検査も必要だし、維持管理に費用が発生するなど、課題はあるが良質の地下水を利用しての、地域活性化は今後、どのようなことができるか研究する必要がある。

伊野商業高校との連携については、生徒がデザインした「もろこっしー」は、とうもろこしをイメージしたキャラクターで、きび街道のPR活動を行っているが、新たなキャラクターについても考えていきたい。

工房施設などの設置については、紙の博物館や観光協会で、ちぎり絵体験・紙ぞうり作り・版画の体験が行われている。工房施設を設置することとなると設置場所の問題もあるが、体験メニューの稼働率などを精査し検討したい。



もろこっしー